

内面化と二重化

——小島信夫「アメリカンスクール」論——

正 田 雅 昭

〈要旨〉小島信夫の「アメリカン・スクール」は、従来日本人の人間関係を中心に戦後直後の社会状況を読み込むことが多かった。本論では、日本人以外の登場人物にも注目し、その様相を全体的な物語構造とともに明らかにすることを目指した。さらに、戦後の英語教育を通じた、アメリカと日本の関係の比喩という従来の読み方に重ねる形で精神分析的な読解を試みることにより、登場人物の役割をより機能的に明確にした上で、物語の設定や英語教育の歴史性の問題を導入した新しい読みの可能性を提示してみた。

小島信夫「アメリカン・スクール」(『文学界』一九五四(昭和二九)年九月)は第三二回芥川賞受賞作品である。選評では、井上靖のものに代表されるように、作品そのものへの讃辞よりはむしろ同時受賞した庄野潤三とともに既に名声を確立していた二氏に対して与えられたものであり、その作品でなくともよかったというのが主たる見解であった。

内容の批判としては、以下の宇野浩二のものが典型であろう。

『アメリカン・スクール』は、ちょっと得意な題材を克明に書いて面白いところもあり、独特なところもあるけど、この作家の前に候補作品になった小説などと比べると、書き方がゴタゴタしている上に、出て来る人物にも、場面にも、不鮮明なところや独り合点のようなところもあるので、私はそれほど高くかえないのである。

この宇野の批評が直接影響しているとは思えないものの、以後続する主要な論点の一つは、人物たちの関係性の整理と意味付けにあった¹⁾。

県の役人に、自己誇大をする山田、コンプレックスを感じて、孤独にとじこもうとする伊佐。その二人の間に女教師ミチ子が巧みに配されている。

ここに代表される人物整理は、その後の論においてもあまり変わることはないが、どうしても日本人を中心に読むきらいはあった。本論ではこの人物関係について、エミリーやウィリアム校長、黒人のアメリカ兵などをも考慮に入れつつ、改めて考え直してみたい。

物語で繰り返し話題となる英語についての考察も重要である。この点を早くから指摘していたの

は、栗坪良樹²⁾であったが、広瀬正浩が指摘する³⁾近代の自己撞着する視座(戦後に導入された英語を問い直し、画一化された英語を歴史化するという視座そのものを排除しようとする)に至るまで、英語をめぐる問題を如何に戦後日本(近代)と重ねてゆくかは、重要な論点である。

また、いとうせいこう⁴⁾や奥泉光、青木淳吾など⁵⁾が、語り手の位置を問題にしており、例えば、いとうは「三人称多元の小説は、読者も奴隷化される」として、このテキストの語りの戦略を指摘しているが、この点においてはもう少し詳細な分析が必要に思われる。

物語のイメージを扱った論として、「箸」のイメージを「米」と結びつけ「米語」を導こうとする池田尚文の論考⁶⁾は、本論で拘泥する構造とは水準の異なる指摘であったため、うまく拙論には反映できなかったが、内容よりも形式的・構造的な面からの指摘として興味深く学ぶところが多かった。内容以前の言葉の運動としてテキストを捉える可能性は、小島文学を考える重要な視座であるからだ。

これらの先行論を鑑みたとき、拙論での分析は、その視座において新しいものがあるわけではない。だが、それぞれの視座においては、もう少し別の角度からの検討が必要であり、さらにそれぞれの視座を如何に有機的にまとめてゆくか。拙論の提示しようとする手法はいたって単純である。

1 内面化することあるいは 教えること

物語冒頭で語られるのは、二つのコントラストである。

集合時刻の八時半がすぎたのに、係の役人は出てこなかった。アメリカン・スクール見学団の一行はもう二、三十分も前からほぼ集合を完了していた。三十人ばかりの者が、通勤者にまじってこの県庁に辿りつき、いつのまにか彼らだけここに取り残されたように、バラバラになって石の階段の上だとか、砂利の上だとかに、腰をおろしていた。その小には女教員の姿も一つまじって見えた。盛装のつもりで、ハイヒールを穿き仕立てたばかりの格子縞のスーツを着こみ帽子をつけているのが、かえて卑しいあわれなかんじをあたえた。(228)

時間厳守する見学団と、約束の時間には現れない役人。見学団の男たちと女教員。わざわざ、「女教員の姿も一つ」と呼称されるのは、この見学団がほぼ男性で構成されていることと同時に教員たちのそれであることを示している。さらにこの見学団が教員であることは、時間厳守であることとも関連していると理解出来る。

一方、語りの「取り残されたように」「かえて卑しいあわれなかんじ」という言い方には、このコントラストの片方(訪問団)に対しての価値判断がはっきりと刻まれている。結論じみたことを先走って言えば、このテキストの主題の一つが、コントラストをめぐるコンテキストである。ただし、そのコントラストはお互いが自律しているわけではなく、相互依存的であることが重要である。

三十人ばかりの教員たちは、一度は皆、三階にある学務部までのぼり、この広場に追いもどされた。広場に集れとの指示は、一週間前に行われた打合せ会の時にはなかったのだ、その打

合せ会では、アメリカン・スクール見学の引率係である指導課の役人が、出席をとったあと注意を何カ条か述べた。そのうちの第一カ条が、集合時間の厳守であった。第二カ条が服装の清潔であった。がこの達しが終わった瞬間に、ざわめきが起こった。第三カ条が静粛を守ることだという達しが聞えるとようやくそのざわめきはとまった。第四カ条が弁当持参、往復十二杆の徒步行軍に堪えられるように十分な腹拵えをしておくようにというのだった。終戦後三年、教員の腹は、日本人の誰にもおとらずへっていた。(228)

この見学団と指導課の役人の関係にも明確なコントラストがある。「指導課」という言い方には、そこに含む権力関係が明示されているわけだが、むしろ「指導課」はただの象徴であり、「終戦後三年」という言い方に明らかな様に、実質的な権力は敗戦直後の支配者側（GHQ）にある。一方、教員の集団である見学団の側を見ても、指導するものでありながら指導されるものであるという二重性を有した存在である。

「時間厳守」や「静粛を守る」といった事項は、教員側にとって、これまで「指導」して来たことそのものである。一方、「服装の清潔」や「腹拵え」に関しては、近代以降そうでありたい（あるべき）と内面化された欲望が、外的な原因（敗戦による政治的経済的支配）によって抑制された現状がある。出来ればそうしたいという内面化された欲望の中には、西洋からの近代化によって形作られたものも少なくない。特に「時間厳守」や「静粛」、「服装の清潔」などが守るべきという倫理教育の結果としてもたらされたものであることは分かりやすい。時間が大切であると思って学校に行くのではなく、学校で学ぶから時間の大切さが守られるべきだと考えるようになるのだ（守れるかどうかは別として）。食欲自体は教育以前に内在している欲望ではあるが、学校という空間は、何のために如何に食べるべきかということを教える場でもある。それが、戦前には育て戦うための身体であったものが、業務（往復十二杆の徒步行軍）に耐えうる身体に置き換わっただけのことである。

だが、教員とは、そもそもこういった内面化された価値観を教える職業であるだけに、戦後直後の状況の中で、〇〇という理由で「服装の清潔」や「腹拵え」をするべきという「指導」に対し、それを出来なくさせているのは社会システム側の問題であるという意識よりも、自らの引き裂かれ感（やりたいがやれないという慚愧の念）を強く感じてしまう存在なのである。

こうした引き裂かれた存在を最も分かりやすく象徴しているのが山田である。

「私たちはただ見学をするだけですか」

「というത്？」

「私たちがオーラル・メソッド（日本語を使わないでやる英語の授業）をやってみせるというようなことはないのですか」

「それはあなた、見学ですからね」

係の者はそのガッシリした柔道家のようなからだをゆすぶり声を一段と高くした。

「この承諾を得るためには、われわれ学務部は並大抵でない群衆をしたんです」(229)

山田が当初から主張していた「オーラル・メソッド」とは、1922（大正11）年～36（昭和11）年に日本の文部省言語顧問であったイギリス人ハロルド・パーマーが提唱した口頭作業を重視した外国

語教授法である。1921年に著した『The Oral Method of Teaching Languages』によると文法・訳読式教授法などの伝統的な方法に対する反動として起こった革新的教授法であった。戦前に大きな影響力をもったこの手法は、戦後にアメリカのC・C・フリーズによるオーラル・アプローチ（口頭接近法）普及の素地をつくるものであったが、この間には深刻化する日米関係により事実上の英語排除政策による断絶期があった。

この時期の英語教育に関して、小川修平が「英語教育の歴史的展開にみられるその特徴と長所」『盛岡大学紀要』第34号）の中で以下の様な指摘をしている。

実際、大正時代に注目を集めた「オーラル・メソッド」は、その中心的人物のパーマーの帰国以降、完全に下火となり、音声重視の教授法にあらためて注目が集まるのは、戦後の「バタン・プラクティス」が紹介されて以降のことである。また、すべてのラジオ英語講座も中止され、学校における英語教育もいくつかの法改正とともに、内容的な規制や時間削減を受ける対象となり、完全に廃止されるまでには至らなかったものの、細々と行われる程度に衰退してしまった。

戦後の英語教育が、GHQの支配体制のもと、「実用」というキーワードとともに急速に復興していったことは有名であるが、そういったいわゆる英語の「復興期」のブームを象徴するのが、一九四六年に開始されたNHKの「ラジオ英会話講座」である。同局のアナウンサーであった平川唯一氏が初代講師となり、「証城寺の狸ばやし」の曲に、「Come come everybody how do you do and how are you」と、英語の歌詞を付けた替え歌が大変な人気を博し、平川は、「カムカムおじさん」(Uncle Come Come)と言われブームの象徴的な存在となった。

財界主導で開催された「日本英語教育委員会」の招聘によって1956(昭和31)年に来日したミンガン大学のフリーズが紹介したこの外国語教授法は、基本構文を少しずつ繰り返しながら音読を繰り返すという「バタン・プラクティス」を特徴としている。伊村元道『日本の英語教育200年』(大修館書店、2003年)によるとエリート向きである「オーラル・メソッド」の実践がやや難解なものであったことに比べ、単純化されたメソッドである音読練習は、1960年代の初頭から中頃までに全国の中学校に普及していったという。

こう考えると、山田の授業提案(オーラル・メソッド)は、やや時代錯誤なものであったとも言えるが、同時に英語の実用性(会話力)を重視し、口語英語(米語)の実践教育の「実力」を示すべきだと考えている点は、時代の潮流に乗ろうとしていた当時の英語教師の面目躍如ぶりをよく示していたとも言える。

しかし、今のインターナショナルスクールと異なり、アメリカンスクールとはそもそも英語を学ぶ場所ではない。英語を母国語とする者たちが通う学校である。柴元が主張出来るのは英語教育の「実力」であって、英語を母語とする者たちに英語そのものの実力を示すことはそもそも矛盾がある。

だが、こうした山田の抱え込む矛盾は、単なるパーソナリティの問題であると言うことは出来ない面がある。

「今云われたように服装はどんなことをしても整えておくべきです。そうでないと、われわれ英語を教えている者の品位をおとし、第一われわれの英語教育のていどまでも疑われるのです。敗戦国民として、われわれは彼らに営められているんです。彼ら視察官が私たちの学校に來た時、私は通訳をしたのでよく知っておりますが、先ずわれわれの服装を見て、目をそむけます。とくに便所です……」

(230)

この山田の発言からは、見学団の教員たちが「服装の清潔」の中に単なる「清潔」以外の要素を含んで理解していることがはっきりと伺える。衛生面で「清潔」であることは、必ずしも「彼ら」(アメリカ)から「営められ」ることを回避出来る十分条件ではないからだ。

例えば、スーツや燕尾服などに代表される正装は、明治1887(明治20)年頃より一般的に普及していったが、戦前のスーツ類は、オーダーメイドで個人の体型に合わせる高級品であり、公の場であっても和装の割合は多かった。しかし、戦前の紳士録類や公的な集合写真にも多くの洋装が見られるように、憧れを内面化したような「正式」感は、近代日本の歴史の中で徐々に内面化されていた。

戦後、スーツ類の大量生産が可能になり、またビジネスが国際化してゆく過程で正装の洋装化は急速に進展してゆくわけだが、戦後すぐの時点でもその内面化はある程度進んでいたと考えられる。また、時代がGHQの直接統治下であったというのも大きな要素だろう。アメリカから期待される「洋服」の「清潔」にそうした要素が含まれるのは、ある意味時代の必然であったわけだ。

ただ、「清潔」という感覚に限らず、教育空間で教授される感覚は、次第に命令されるものから自発なものへと変化する。いわゆる「内面化」の過程であるが、日本にとって敗戦とは、内面化させた者たちからの支配の始まりであるが故に、その支配への追随は、かなり自発的な形で行われたのである。

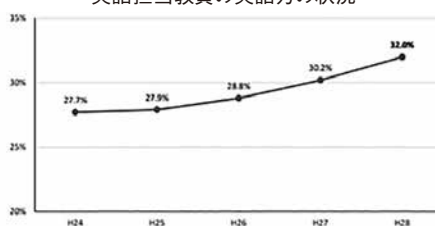
2 支配される日本あるいは 支配されたがる日本

伊佐は英語を担当しているというだけで選挙の時に通訳にかり出されて、ジープに乗って村々の選挙場をまわったことがある。選挙はすべて占領軍の監督の下に行われたのだ。彼は英語の会話をしたことはそれまで一度もなかったし、自分が英語を教えている時、会話が出てくるとくすぐったいような恥しい気持ちになった。

(231)

伊佐は英語教師として特別な存在などではない。平成28年度「英語教育実施状況調査」では、英語担当教員のうち、英検、TOEFL、TOEICなどの英語能力に関する資格・検定試験により、CEFR R2レベル相当以上のスコア等を取得しているものは全体の32%に留まる。現在でも文科省の定める英語会話能力に達していない教員の

英語担当教員の英語力の状況



割合は七割近くになるのだ。もちろん、英語教務能力と教授側の会話力は直結しない。また、何をもって英語力とするのかも、英語教育を論ずる上で重要な観点であることも間違いないだろう。

だが、ここで問題なのは、伊佐本人が、英語教師であることと英語が話せないことの間で引き裂かれていることである。

彼は選挙場へは入って行かなかった。彼がいなくて黒人が場内から引返してくると、彼の姿はない、彼はどことなくサツとかくれてしまったのだ。彼はそんなことをするくらいなら初めから休んでいた力が難訓なくらいだったのだが、いざとなると場内の洄廊の中で柚子の分らぬ英諾を聞きとったり、自分が話すことを思うと、足がすくんでしまうのだ。

ここで、実施された「選挙」とは、1946(昭和21)年4月10日に行われた帝国議会(衆議院)議員の普通選挙のことであろうか。周知の通り、前年の幣原内閣の解散は、GHQ解散などと呼ばれることもあり、翌年の選挙もGHQの管理下で行われた。もちろん、テキストでは、「敗戦後三年」なので、社会党が衆議院の第一党となった第二回総選挙をさしている可能性もあるが、それも同様にGHQの「指導」下にあった。本来、その「指導」の役に立つべき位置にいるのが伊佐たちだったのだ。

だが、全く英語を話そうとしない伊佐は、通訳の仕事をも放棄し、速力のおちたジープから山道に沿った雑木林に飛び降りてしまったのである。

さきのいとうせいこう等の指摘の様に、語り手は、全ての人物に自由に多元内の焦点化しているので、黒人が伊佐を探しにきた背景には、山林に一人残された「おそれ」があることがわかる。しかし、伊佐も同時に英語(を話さなくてはならない相手)を恐れている。

彼は林の中で待っていて、

「おい」と日本語でいった。「お前に日本語を話さしてだな。話せなかったら容赦しないといったら、どうなるんだ」

(233)

だから、本来は、この台詞も単なる脅しではない。しかし、この語り手の位置によってより読者に伝わるのは、二人のすれ違いそのものである。「馬鹿らしく劣等感さえ感じできたのであろう」という推量を伴った黒人伍長の内面描写は、そのことをよく示している。山本幸正は、この「劣等感」に注目し、戦争を挟み英語から米語に移行した英語教育が、黒人に幻想的な「正しい英語」を想起させ、結果逆説的に自らのヒンジ語的な英語を見出したという慧眼な読みを提示している⁷⁾が、ここで繰り返される黒人の「孤独」という表情の特徴も、伊佐には届いていない。

だが、多元内の焦点化による語り手の描写には、故に読者が特権的にアイロニーをかける可能性があることにも注目する必要があるだろう。占領側であるアメリカ人にとっても、ここは数年前まで敵国であった場所なのである。さらに、黒人とはアメリカ人の中では裡なる差別の対象でもあった。日本における占領軍の黒人とはこうした二重に疎外された存在でもあるのだ。

ラジオと並び戦後の急速な英語ブームを象徴するものに、科学教材社(実質的には誠文堂新光社)による『日米会話手帖』(一九四五(昭和二十)年)がある。戦後初のベストセラー(ミリオンセラー)

として有名なこの書籍は、「米」というタイトルを付しながらも、収録されている例文には、イギリス英語のものも少なくないという指摘もある。

しかし、ここで重要なのは、英語から米語の移行には、「会話」という実用的な側面がともにあったということだろう。福島鑄郎『日米会話手帳』が売れた時代』（朝日新聞社、一九九五年）によると、同年に未までに精文館『模範日米会話』、産業図書『実用英語会話』、愛育社『ポケット米日会話』『ポケット日米会話』、文化社『わかりやすい日常英語会話』、文化生活社『日米会話帳』、朝日新聞社『ハンドブック日米会話』などの類似本が出回りはじめるが、これらの書名には「米」とともに「会話」という文字が含まれている。

こうした英語教育の転換が、高度経済成長以降の大学進学率の増加とそれに伴う受験英語の過熱ぶりにおされ、再び読み書き重視の方向に戻ってしまったことは、結果には、「アメリカンスクール」というテキストの批評的アクチュアリティを補完した形になったとも言えるが、伊佐の姿は、こうした戦後直後の時代状況の産物でもあったのだ。

3 アイロニーが進める物語

伊佐の行動原理は目立たないことである。アメリカに対しては、旧日本軍を想起させる服装を避ける（隠す）ことそして英語を話さねばならないシチュエーションを能う限り回避することである。

一方、山田は常に伊佐との対照性をもって描かれる。山田はアメリカ人に英語を話し、その実力を誇示するために、わざと目立つ行動をとる。

「煙草はけっこうです」

「それでお前さんが指揮者なのか」

「指揮者は県庁の役人です。もう集合時刻をとくにすぎているのですが来ないのです。役人は怠慢でよくない。しかしそういう日本人ばかりではないのです」

「お待たせいたしましたまことに相すみませんでございました」

黒人は英語でそう云うとめんどくさそうに手を振って去って行った。山川は黒人の最後のセリフの意味がよく分らず、役人の云うセリフを代りにしゃべっているのかと思ったので、腕時計を見ながら口走った。

(235)

この山田の台詞は、西洋から学んだ時間厳守という価値観を内面化しつつも、それを日本人の誇りとして主張しているという逆説性がある。

それに応答する「お待たせいたしましたまことに相すみませんでございました」という台詞からは、この黒人が伊佐と同乗していた人物と同一人物であることを暗示しているが、興味深いのは、山田もこの台詞の意味を解していないことだ。

「役人の云うセリフ」という連想から、文法的にこの言葉の意味が分からないわけではないようだし、戦前のイギリス式英語の典型的な例文というわけでもないようだ。であるならば、テキストから理解出来ることは、この台詞がもつ過剰な丁寧さということになる。黒人からは、待たされ

ている日本人への冗談として引用された英語であり、また通常使われないレベルにまで過剰に丁寧すぎる英語が日本人の英語であると思った嫌味なのかもしれない。

日本語を話せば、英語も話さねばならない。日本語を最初から最後まで一言もいわず、沈黙戦術をとるならば、人は彼が今日はどうかしていると思うにちがいない。そうすれば学務部の役人もほかの教師も、彼がしかるべき時に英語を一言も云わなくとも、英会話が出来ないとは思わぬであるうと思ったのだ。(238)

この伊佐の考えも当然山田には伝わらない。物語は、それぞれのアイロニーによって進んでゆく。整列、軍服、軍用品など、山田たちは、アメリカ人から見られた印象を考慮して、ミリタリー的な雰囲気を感じさせるものを忌避する。しかし、伊佐たちが軍用品を所持せざるを得ないのは、それしか持っていないからだ。それでも、目立たないように、伊佐はなるべくそれらを隠そうとする。

アメリカン・スクールまではたっぷり六軒あった。そこには舗装されたアスファルトの道が、市外に出るとまっすぐつづいている(238)

当時の自動車道路とは、アメリカ軍のためのものであった。そもそも、自動車を所有する日本人など僅かであり、道路が舗装されるのは、アメリカ軍の軍用車が移動するためである。結果、軍の施設やベースキャンプなど彼らの生活拠点、それに主要地域が結ばれて、自動車用道路の幹線網が出来上がる。

アメリカン・スクールに行こうとする日本人は、この道路を歩いて通らざるを得ないわけだが、一方アメリカ人から見れば、車用の道路を集団で歩く日本人は奇異にしか見えない。

結果、一行はしばしばアメリカ人たちの関心をひいてしまうのだが、それは伊佐にとって恐ろしい事態である。

ミチ子の手にはチーズの縦がわたされた。伊佐は、ミチ子が声を立てて笑いだし、伊佐の袖をひくので初めてミチ子の方をふりかえった。彼は大分前からそば向いていたのである。彼は、ミチ子のそばにいるために、外人が自分のそばにも集ってくるのでは、かなわないと思った。彼はミチ子の会話中にずっと田圃の方を見つづけていた。(240)

話しかけられる可能性は一行の中のどこに居ても同じではあるが、数少ない女性であるミチ子の側にいることは、余計にその危険性を高める。にもかかわず、伊佐がそこに居続けるのは、ミチ子の英語が達者であり、ほぼ全てのコミュニケーションを代替してくれることと、食料のおこぼれまで貰えることが理由であった。

ミチ子が伊佐にチーズ缶を与えたり、伊佐の側に居ようとしたのも、ある意図があつてのことだったが、伊佐はそれを若干の好意として解釈している。ここにも大きなアイロニーが働いている。

ところで、当時の米軍が配布していたものとして、チョコレートやガムなどは有名であったが、

チーズ缶とはどういったものであったのだろうか。

そもそもチョコレートやガムは、エネルギー摂取率が高い携帯食品として軍が配布していたものであったが、アメリカにおけるチーズの普及は二次大戦中に急速に伸びたものであった。

アメリカではジェームズ・ルイス・クラフトがアメリカンチェダーチーズを用いたプロセスチーズを作ることに成功し、これが、軍の大量受注を得ることにより、同社はのちに世界一のプロセスチーズ製造会社となるクラフト社を設立した（現在の、クラフト・ハインツ）。クラフトの親会社であるナショナル・デイリー・プロダクツは、一九四四年だけでも一億ポンド以上を米陸軍に売却したが、こうした大量受注により倉庫をほぼ満杯な状態にしたまま、第二次世界大戦は終りを迎えることになった。

アメリカのチーズといえばプロセスチーズであることもこれに由来するが、固化化させ長期保存しやすいこのチーズは、缶詰として流通し、これがアメリカ軍により配布されたのであった。

もちろん、これが当時の日本人達にとって貴重な栄養源であったことは間違いない。また、ミチ子が他の男たちには手軽に分割可能なお菓子類をシェアしておきながら、缶詰の方は伊佐に渡していることも注目してよいだろう。

ミチ子は伊佐が頑強に拒むので、せっかくわいてきた男に対する慕情が消えて行くのをかんじた。汗ばんできた肌が、何か自分の心の不潔さを聯想させた。あれだけ借りればいい、いや、場合によっては借りることだって、どうでもいいと思った。(246)

一時的にせよミチ子の「慕情」の喪失は、チーズの譲渡、靴擦れの心配などの行為の裏に「あれ」にまつわる意図があったことをよく示している。しかし、興味深いのは、伊佐の頑固さはミチ子の亡き夫と重なり、かえって伊佐に対する思慕の念を強めていることだ。

アメリカン・スクールに着いたら話しかけて見ようと思った。するとミチ子は自分のハイヒールのことが、花の蕾のような感触で、包みの中でよみがえってきた。そう、向うでハイ・ヒールをはいた時に彼に話しかけて見ようと思った。(253)

ミチ子がわざわざ所持しているハイヒールは、長い距離を歩くには不要なものである。明らかにミチ子にとってハイヒールは、歩く為の道具というディノテーションを超えた意味を持っている。

だが、ここで確認しておかねばならないことは、こうしたミチ子の一連の感情は、すべて理解のすれ違いによって起こっているということだ。語り手の多元焦点化は、ここでも我々だけに、アイロニーの存在を強く示している。

柴元は戦争前まで柔道では県下でも有数な高段者の一人で、講道館五段だということを話していた。柔道と戦犯の人物とは何のかんけいもない、そのしょうこに自分は今、レッキとした県庁の、それも学務部の指導課にいることでも分る、と云った。柴元はそれから警察と、米軍とに柔道を教えているのだ、とつけ加えた。彼がその地位についたのは、その米軍指導の恩恵の

ためだった。

(247)

柴元は、山田と意気投合していた。柴元は、戦後の社会変化を実に上手く生き延びた人物である。現在の地位（公務員の指導課）に結びつけたのは、米軍と武道（柔道）である。

山田は柴元が米軍に柔道を教えていると聞くと、急に眼をかがやかしはじめた。山田は通訳から、米軍とのあらゆる交渉に興味をもっていた。それだけではなく、彼はチャンスをつかんでアメリカに留学したいものと願っていた。彼はその野心のために、日夜、生き生きと、それから小心翼翼と生きていた。

(247)

一方、山田は、指導課の役人を利用して、留学や日本の英語教育のヘゲモニーを狙っている人物である。山田と柴元とを結びつけていたのも、米軍と武道（剣道）である。

二人のアメリカンスクールに向かう歩行は、それ自体がアメリカの傘下にあることの象徴だが、そこで戦犯すれすれの軍隊での行為を武勇伝の様に語り合う姿が、戦後直後の男たちの不安定かつ矛盾した在り方を示している。

この両者の軍を媒介にした会話が、山田の心の裡にある形を与えた。それは「規律破壊者」という言葉だ。直接的には一行の歩みを乱す者としての意味であるが、その言葉は「軍」のイメージを暗示してしまうはずだ。もちろん、山田のやることなすことに邪魔となる存在であるという意味が本音であろうが、それは山田自身が自らを「規律」と信じていることを示している。（恐らく山田はこのどちらの矛盾にも気がついていない）

山田の「指導」は、結果的に、靴を脱ぎ周りを取り囲んで歩くという結果を生み出してしまう。だが、それは足の痛みを忘れかつアメリカ人たちから目立たずに済むという、伊佐にとっての理想状態であった。

伊佐によって乱れた「隊列」が戻ったことは、山田にとって望ましい結果であるはずだが、「規律破戒者」とであるという判断のコノテーションにとっては真逆であったとも言える。また、伊佐が早く歩くようになったのは、歩けるようになった以上に、アメリカ人にコンタクトを取られるよりも前に目的地に着きたいという気持ちだけだったのだが、それは山田にとってこれまでの伊佐の反抗ぶりを再確認する結果となった。やはり物語は、常にアイロニーによって生み出されているのだ。

ところで、伊佐という名前は珍しい名前ではないだろうか。名字の発祥は、沖縄、茨城、山口、朝鮮半島と四説あるが、沖縄在住の人数（三九〇〇人）が飛び抜けて多い（二位の東京の六倍以上）。柴元も同様に珍しい名字で、ほぼ佐賀に集中している。

物語は、一見伊佐と山田の対立軸が目立つが、山田のモデルティーチングの提案に柴元はかなり否定的である。柴元からすれば、ただ「行儀よく」「礼儀正しく」見学してくればよいのである。見学は、敬意の表明であり、間違っても敵意や矜持を示そうとするものではない。その意味で、柴元と伊佐の目的は一致している。山田（全国一二位の名字）が、戦後直後の日本の男たちの典型的な存在であるのだとしたら、南方系のマイノリティの名字である柴元や伊佐は、近代の生み出した両極の日本人とは言えないか。倒幕から新政府樹立に尽力した人々に典型的な様に、近代日本の為

政者の多くは南方系の人々であった。一方で、戦後東北地方の潜在労働力（金の卵世代）が可視化されるようになるまで、近代日本の被差別者たちの出身地の典型の一つには、沖縄が挙げられた。

戦後社会がアメリカの支配により変容を遂げたとしても、変わらない図式がここにある。特に伊佐という名字が象徴する沖縄は、アメリカ支配の犠牲の歴史そのものである。

そして、この物語は、伊佐や柴元あるいは、ミチ子の視線で読んでしまう傾向があるため、どうしても山田を特殊な存在であると捉えがちである。しかし、いかに山田の言動が強引であったとしても、結果的に一行がそれに右往左往させられるのは、山田のアメリカ（英語）に対する矛盾する感情それ自体が、まさに戦後日本人たちの素朴な感情そのものであったからではないか。戦後日本にとって、米語（英語）とはアメリカの象徴である。アメリカは支配者、征服者でありながら、文化的、物質的な憧れの象徴である。

一方、ミチ子は、アメリカ／日本のホモソーシャルな支配／被支配の関係とは、異なった立場にある。アメリカと最も上手にコミュニケーション出来るのも、アメリカの男たちが最も話しかけるのもミチ子である。さらに、ミチ子は、アメリカから日本の男たちに食料を供給する唯一の媒介ですらある。

マイク・モランスキーは、物語における、女たちが名字を奪われた存在であることに、ホモソーシャルな世界における従属性を見出している⁸⁾が、こうした中で唯一無二の日本人女性に「ミチ」子という名が付されていることも偶然ではないだろう。

また、「ミチ」はカタカナ表記でありながら、それが示しているのは、英語の音ではない。ここに表象されながら隠蔽されているのは日本語の文字「道」「路」の方である。歩行する物語といってもよいこのテキストにおいて、「ミチ」子とは、重要かつ象徴的な役割を負っている。なぜならば、ミチ子の勘違いによる慕情が、伊佐の勘違いを生み、その両者の姿が山田の嫉妬心の様なものを喚起し、伊佐との対立をより深めているからだ。また、英語が堪能でかつ唯一の女性であることからアメリカ軍の目を惹くこととなったミチ子は、物理的にも技術的にも歩行中アメリカ軍との媒介的な存在であった。

4 想像された道 あるいは ミチ子の理想

このテキストの設定について述べた小島の有名な言説⁹⁾がある。

「アメリカン・スクール」は、先年成増のアメリカン・スクールを見学に行ったことがあり、その時に、箸を女教員に貸したことがあった。誰かハイヒールで転んだ人のあったことは、教育庁の人に聞いた。もちろん、この道路上の出来事も、その他、事件らしい事件は、その時には一つも起らなかった。山田は架空の人物だ。僕はこの見学を戦後二年間ぐらいの所においてみて、貧しさ、惨めさをえがきたいと思った。そのために象徴的に、六軒の舗装道路を田舎の県庁とアメリカン・スクールの間に設定してみた。それから今までなら「僕」として扱う男を、群像の中の一人物としておしこめてみた。

ここで述べられていることは、人物や設定にはモデルがありながらも、ある「象徴」という意図をもって改変を加えたということであるが、このことを少し掘り下げて考えて見よう。

アメリカン・スクールまではたっぷり六軒あった。そこには舗装されたアスファルトの道が、市外に出るとまっすぐつづいている。

この集合場所の「県庁」とは何処なのだろうか。目的地のアメリカン・スクールが、当時成増にあったアメリカ村を想定していたのなら、そこまで歩くことができる「県庁」とは、埼玉県庁しか想定出来ない。埼玉県庁は、当時も浦和にあったので、浦和から成増に出るためには旧中山道（現在の国道17号線）を使わねばならない。中山道は旧五街道であったから、当時から、重要な道であったことは間違いないが、浦和周辺は軍用の重要な施設を有していた地ではない。

十分もするとアスファルトの道が見えてきた。自動車がひっきりなしに通った。アメリカン・スクール附近には、そこから数里はなれたところにある大部隊に出ている軍人軍属の宿舎があった。

その道は歩くための道ではないために、あまり遥かにまっすぐつづいているので、一行の中から溜息がいくつも洩れた。

(239)

成増には「軍人軍属の宿舎」があり、アスファルトで舗装された車用のまっすぐな道路がある場所という条件が当てはまる。しかし、ここで確認しておかねばならないのは、戦後すぐになされるアスファルト舗装が軍用車を走らせる目的のためであったことである。つまり、占領軍（とその関係者）たちにとっての主要道路が幹線道路として機能するわけであり、必然的にそれは軍施設を結ぶことになる。

成増には川越街道（現在の254号線）が走っており、戦後一早く舗装された道路の一つである。また、この物語内で見学団の一行が大きく曲がったという描写がなされることはない。

一行の歩く道路について、以下の引用は重要ではないだろうか。

彼は行く先きの道路が途中で上りになっているためにアメリカン・スクールが見えないので、どのくらい来たものか、ふりかえてみた。そして彼は失望した。県庁さえもまだかなりの大きさで見えていたのだ。

(244)

道路はただだまっすぐに伸びた自動車道路である。それは、軍の施設へと続く。であるからこそ、軍の車両がひっきりなしに通るのである。

柴元は坂をおりてやがて見えだした目的地の建物を望見していたが、迷惑そうに首をかしげた。

(254)

地平線の距離とは凡そ五キロ程。実際には坂による影響もあるだろうが、六キロの直線道路とい

うのは、高低差を考えなければ、眼前に目的地であるアメリカンスクールが見え始めて来たところは、丁度振り返った時に県庁が見えなくなる距離なのだ。

見学団は常に、派遣主である県庁を後ろに背負ったまま歩き続け、気がつけば眼前には派遣先のアメリカンスクールが見えてくる。柴元に象徴されるように県庁は、アメリカンスクールに対して何かを提案したり主張したりすることを望んではいない。支配者側の言語を教えようとする教員たちが、「本場」の学校を敬った態度で見学すればよかったのだ。また、アメリカンスクールの方も、視察団に何かを学ぶつもりは毛頭ない。むしろ、ある種の「手本」として見せてあげているという意識の方が本音であったはずである。アメリカンスクールのウィリアム校長の丁寧でありながらも威圧的な態度は、そういった支配者側の意識をよく象徴している。

アメリカンスクールによって、伊佐、山田は、それぞれの形で、まさにアメリカに圧倒されているが、自己顕示欲を完膚なきままの形で否定された山田はともかく、以下の伊佐の心内描写は、興味深い。

彼はこのような美しい声の流れである話というものを、なぜおそれ、忌みきらってきたのかと思った。しかしこう思うとたんに、彼の中でささやくものがあった。

(日本人が外人みたいに英語を話すなんて、バカな。外人みたいに話せば外人になってしまう。そんな恥しいことが……)

彼は山田が会話ををする時の身ぶりを思い出していたのだ。(光全な外人の調子で話すのは恥だ。不完全な調子で話すのも恥だ)

(259)

山田がネイティブに対して己の英語教授能力を誇示しようとする事自体の矛盾については前にふれた通りだが、多かれ少なかれ、言語を学ぼうとする者たちは——それがかつての「宿敵」の言語であったとしても——ネイティブの様に話すという理想を内面化している。その意味でも山田は、戦後社会における多くの「矯正」(去勢)された日本人の像であったのだ。

しかし、伊佐にとって英語とは単なる「外人」の「言葉」ではない。言葉とはその人間そのものであり、英語を身につけることは日本人としての日本語が奪われ、「外人」になってしまうことを意味するのだ。もちろん、この意識も、逆説的な意識としてではあるが、当時の日本人の中にはあり得たことは、武者小路実篤の日本語廃止論などを考えてみればわかる。

だが、伊佐の意識が興味深いのは、自らの存在基盤の喪失を感じながらも、奪い去ろうとする言語の「音」に「美しさ」を感じてしまっていることだ。これが、英語教師であることから来る内面化なのかは断言出来ないが、当時の日本人が、ラジオから流れる英語の「音」に魅了されていたこと、そして戦前の英語は戦後の米語によって、「会話」のツールとして注目されていたことを思いおこせば、これも当時の日本人の像であったとも言える。戦後の日本人は、伊佐と山田という鏡像段階を抜けることでなしえた象徴世界を生きるしかなかったのかもしれない。

一方、ミチ子は、多くのアメリカ兵たちを「魅了」し、優秀な「英語」でアメリカ軍と対等に渡り合い、同僚の男達の「食欲」の媒介となり、山田に象徴される経済的なマウンティングにすらひれ伏すことのない自立した「女性」としてアメリカンスクールまでの道を闊歩していった。

しかし、アメリカンスクールにおいてミチ子は最も徹底した形で敗北させられた存在であった。

エミリー（この名前も語源的には、誠実、真面目、潔癖などを意味する、ある意味教員らしい名前である）の前で、ハイヒールを履くことに躊躇したミチ子は、女性性という意味において完全な敗者とされたのだ。

するとミチ子は急に伊佐の耳もとに何か囁いた。伊佐はそれが日本語であるのでホッとした。
「えっ？ そりゃあなたさえ……」
そう云うと伊佐は囁いた当のミチ子より真赤になった。
「ねえ、それも恥しいことなの？」
ミチ子は何となく浮き浮きしたことを云いだしたのは一つには彼らの目の前に展開されている光景のためかも知れない。

(281)

そもそも、ミチ子が箸を借りる相手として伊佐を選んだことには、亡夫に重なる「慕情」があった。そして、ここでも、彼らの眼前には、応援する／される若い男女の（当時の日本よりは）解放された姿があった。

また、伊佐と密談するミチ子の様子は、山田の対抗する心情を強く喚起してしまうが、ここにあるのもある種の「慕情」の様なものである。その意味で、ミチ子は精神分析的な「エス」であるのだが、言うまでもなく両者に介入し得ない山田は「超自我」たり得ない。

「これからは、二つのことを厳禁します。一つは、日本人教師がここで教壇に立とうとしたり、立ったり、教育方針に干渉したりすること。つまり、あまり熱心すぎることを。もう一つは、ハイ・ヒールを穿いてくること。以上の二事項を守らないならば、今後は一切参観をお断りすることもあります」

(283)

この関係に介入するのは、言うまでもなくウィリアム校長であるが、それは当時の日本社会におけるアメリカそのものなのである。戦後日本社会において、アメリカは「超自我」であった。ウィリアム校長が介入したのは、伊佐と山田の鏡像関係であり、ミチ子と伊佐のそれではなかった。

箸を借りようとした際の転倒によりミチ子が衛生室に運ばれたことは、欲望の除去であり去勢の象徴であった。それと同時に山田の男性性の象徴（熱心な英語教育の誇示）も、ミチ子の女性性（ハイヒール）も「禁止」される。それらは、アメリカ（超自我）が示した様な規範の中で実現されるべきものののだ。

いつまでたっても山田がウィリアム氏の宣言を通訳しないので、柴元が山田の胸をつつくと、山田はようやく我に帰り、物も云わずそのまま入口の方に逃れるように走って行くと、その後を柴元をはじめ日本人教師が思い出したようにくっついて駈けだした。そして伊佐は又もや一人とり残された。

(283)

アメリカンスクールの「入口」に走っていく山田とそれを追隨する柴元や日本人教師たち。かれらの行動は、校長が提示した「超自我」に自ら「順応」していった様子をよく示している。

ラカン≡フロイトによれば、実現されたなかった自己は斜線によって消去された主体(S)である。主体(S)の実現の為には、超自我への参入が必要だが、それは鏡像の否定でもある。アメリカという他者によって直接欲望を与えられている山田に限らず、「象徴界」に移行する全ての人にとって「超自我」とは常に他者の欲望の模倣である。皆がアメリカの「入口」に「くっついて駆け出し」て行ったのである。

「とり残された」伊佐とは、戦後日本人が象徴界への参入のために犠牲とした、己自身の姿(S)であったのだ。

注

テキストの引用は、新潮文庫『アメリカンスクール』1967年6月。引用末尾の()は引用の頁数。

- 1) 「現代作家の代表作梗概」『解釈と鑑賞』第29巻10号 1964年9月
- 2) 栗坪良樹「芥川賞作品事典」『解釈と鑑賞』第42巻2号 1977年1月
- 3) 広瀬正浩「ネイティヴ・スピーカーのいない英会話——戦時・戦後の連続と「アメリカン・スクール」」『名古屋大学国語国文学』第88巻 2001年
- 4) 奥泉光・いとうせいこう「文芸漫談」『すばる』第35巻第五号 2013年4月
- 5) 奥泉光・保坂和志・青木淳悟「〈鼎談〉特集 戦後文学を読む」『群像』第六七巻第四号 2012年4月
- 6) 池田尚文「小島信夫『アメリカン・スクール』論——小島信夫の difference あるいは箸、畠、痕跡——」『早稲田現代文芸研究』2012年3月
- 7) 山本幸正「被占領下における言葉の風景—小島信夫「アメリカン・スクール」をめぐる—」
- 8) マイク・モランスキー『占領の記憶／記憶の戦争』2006年3月 青土社
- 9) 「あとがき」『アメリカン・スクール』みすず書房 1954年9月。